

生涯学習やまがた



高校生達がテーマを決め、想いを込めて制作している
手形アート



デザインを考案したイルミネーション



折り紙アート制作の様子

CONTENTS

- ② 特集
「食を通じた地域の居場所づくり」
～食を通じた豊かな地域づくりのこれから～ (平野 覚治氏)
- ⑤ あなた やまがた たからびと⑩
萩生田充知子さん・祐司さん (上山市)
- ⑥ 事業紹介
令和5年度山形県生涯学習センター事業紹介
- ⑦ このまちに注目！
舟形町教育委員会・二井宿わくわくプロジェクト
- ⑧ Information
山形県生涯学習センター助成制度【二次募集】のご案内、洗心庵からのお知らせ、
高齢者生きがいづくり・生活支援活動人材育成等事業、地域づくり人材育成セミナー、
山形県地域づくり実践交流会

高校生ボランティアサークル ふなっ子

舟形町の高校生ボランティアサークルふなっ子は、40年以上もの歴史あるボランティア団体です。町内在住の高校生を対象とし、現在高校3年生4名で舟形町中央公民館を拠点に活動しています。メンバーの学校がそれぞれ違うために、活動の日程調整が大変ですが、学校とボランティア活動の両方を頑張っています！

→活動内容はP.7へ

特集

全国各地で子ども食堂や地域食堂などが行われています。孤立や貧困などの社会課題の対策のみならず、多世代をつなぐ地域の拠点としての機能も果たしています。1人ひとりの多様な幸せから地域の豊かさへ、食を通して地域づくりについて平野覚治氏より寄稿していただきました。

「食を通して地域の居場所づくり」

〜食を通して豊かな地域づくりのこれから〜

一般社団法人全国食支援活動協会専務理事

老人給食協会ふきのとう代表

平野 覚治 氏

寄稿にあたり

東京世田谷で40年老人給食を実施している「老人給食協会ふきのとう」の代表として、活動の継続と全国の食事サービスタ活動の支援に努めてきた。ふきのとうをはじめとする各地の高齢者を対象にした配食や会食活動を担ってきたボランティアの主軸は70代となり、食支援の利用者は子どもから若者、ひとり親世帯、そして高齢者等と広がってきている。これまでの活動をふりかえり、これからの食支援活動の意義と方向性について考えてみる。

1-1 1. ふきのとうの活動について

1-1 ふきのとうの活動が始まった

1977年に東京都世田谷区桜丘の一角で、世田谷区より1年間限定でひろば（公共施設の建築予定地）を地域住民が無償貸与を受け、「桜丘冒険遊び場」運動が始まった。運営は大学生、そして近隣小学校のPTAのお母さん数名が遊び場を支えた。このPTAのメンバーに後にふきのとうの創始者である私の母、平野眞佐子がいた。運営資金を調達する必要がある、小学校のPTA有志が古布や古紙回収で活動費用を捻出。実家は廃品回収の一次置き場となり、母が妹を背負いながらリアカーを引いていた姿を覚えている。冒険遊び場の運動は新たな住民活動となったが、自分たちの子どものための活動と批判もあった。これに対して、冒険遊び場のボランティア（PTA）は女性や子どもだけでなく、男性や

地域住民が参加するきっかけづくりとして火を焚き、焼き芋やカレー、棒切りに小麦粉を巻き付けた冒険パンを焼くことで、男性や年配者も参加するようになった。この時の経験から食は「誰もが参加できるコミュニティづくり」の手法であることを学んだ。その後、広場に公共施設が建築される計画が示された。敷地いっぱい建物に配置され広場は残らない計画となっていた。冒険遊び場に参加した主婦たちは、広場を残す署名のために一軒一軒広場の周辺の住宅を回り、団地の3階に足り、目の悪い高齢者が暮らしていたり、目の悪い高齢者が暮らしていたり、目が悪く気づくことになる。そしてまちの中で家族のように支え合うしくみづくりをと、世田谷区基本計画へ地域からの提言を提出し、「地域は一つの家族」という考え方のもと、手づくりの食事を一緒に食べる会食会を開始した。こうしてふきのとうは、1983年4月に11名のボランティアと13名の利用者とが鍋釜を持ち寄っての活動となった。

1-2 毎日型食事サービスタ活動について

1989年に東京都の助成を受けて、毎日型配食サービスタ活動が始まった。世田谷区の公共施設では1団体は週に

1度まで会場を借りることができたが、厨房を備えた専用拠点が必要だった。平野宅の建て替えを契機に、自宅に業務用厨房を整備することで毎日型食事サービスタ活動に取り組むことになった。徐々に回数を増やすと共に活動エリアも拡大していった。通えるうちは会食で、通えなくなったら配食へと食支援の連続性が可能となった。

1-3 男性料理教室について

男性で調理ができないからと配食サービスタを希望する声は一定程度寄せられていた。調理ボランティアからは、調理ができないというだけで自分の夫以外の食事の面倒を見ることへの疑問が上がるようになった。柴田博先

平野 覚治 氏 プロフィール



社会福祉法人ふきのとうの
会理事、老人給食協会（日
本）応用老年学会理事、（一社）
ユニバーサル志縁センター常
務理事、（一社）全国食支援
活動協会 専務理事、（社）
東京都社会福祉協議会、
住民参加型助け合いサービ
ス部会運営委員、地域福祉
推進委員、社会的企業研究
会 運営委員、「広がれボラ
ンティアの輪」構成委員、
その他、世田谷区喜多見上部
自治会副理事長、世田谷区
立砦小学校学校関係者評価
委員長他

生（日本応用老年学会会長）の、調理ができない方には食事を届けるのではなく、調理技術を習得していただく方がよいという「手段的自立」の考え方を基に、1998年より男性料理教室が始まった。教室の運営は地域の区民センターの活動にふきのとうの講師を派遣する形で開催した。教室の講師陣はベテランの調理ボランティアが担い、卒業生は千人を超える。ふきのとうは男性ボランティアも徐々に増えて、配達だけでなく、調理にも多数男性が参加している。

1-4 社会福祉法人を取得する

NPO法が制定される前の1993年、ふきのとうの活動の継続に向けてボランティアでも事業がきちんとできることを示すために社会福祉法人格の取得を目指すことになった。厚生省（当時）、東京都、世田谷区それぞれに実績を評価していただき、1996年1月に社会福祉法人が認可された。ふきのとうでは、ケアやプログラムに於いても地域住民がボランティアとして参加できる運営を目指し、2014年にサービス付き高齢者向け住宅と通所介護施設を整備し、施設を運営することになる。因みにコロナ禍における毎日型食事サービス活動（配食）は、

ボランティア同志で話し合った結果、一度も休まずに活動を続けている。自立を目標とした創設者たちの精神は、いまも受け継がれている。

2. ネットワーク活動について ——全国食支援活動協力会

日本で初めて老人給食のシンポジウムを1985年に東京世田谷にて開催した際に、海外の老人給食の先駆事例として来日していた「ミールズ・オン・ホイールズ南オーストラリア協会」より呼びかけられ、国内の住民参加による会食・配食食事サービスを行う全国の活動団体の連絡組織として、「全国老人給食連絡協議会（現、全国食支援活動協力会）」が事務局をふきのとうとして1986年に設立された。以来、食事サービス活動従事者のスキルアップと情報交換、調査研究事業、政策提言を行ってきた。2000年前後より、食事サービスの担い手として障がいのある方が参加されるようになり、また、引きこもりの若者や多様な年齢の方々「安全な居場所」として、高齢者以外の食支援の要素を併せ持つようになってきた。そして2016年「広がり、こども食堂の輪！全国ツアー」の事務局を本会が担うことになり、47都道府県に子ども食堂を普及推進するため

に全国ツアーを開催した。2016年から3年間の限定した活動であったが、その間に子ども食堂が急速に広がったことをうけ、「こども食堂サポートセンター」プロジェクトを立ち上げた。休眠預金事業助成（一般財団法人日本民間公益活動連携機構（JANPIA）を活用し、2020年度より3年間「こども食堂サポート機能設置事業」として、子ども食堂支援のモデルを全国4カ所（福島・大阪・北九州・那覇市）に設置した。

2-1 コロナ禍における変化

2020年1月にコロナが発生し、2月後半より学校が休校となり、感染予防から飲食業、観光業、宿泊業他多くの業界が自主的に営業を休止する事態となり、経済的にゆとりのない世帯に対する影響は深刻化した。地域の中で社会福祉施設、子ども食堂等居場所団体、社会福祉協議会などが自発的に支援に取り組み始めた。こども食堂サポートセンターは2020年4月より活動を開始する予定だったが、地域の子ども食堂や居場所づくり団体から、ひとり親世帯など生活にゆとりのない世帯等に対する食料支援の要請が寄せられた。本会は企業や財団に対して、各地のサポートセンターを通じた食料

や資金的な支援を求める活動に取り組み始めた。その際に企業が食料を提供する時に、全国各地の団体との連絡調整や送料負担等がネックとなり、寄贈が思う様に進まない現状があることを知った。そこで、全国一律に寄贈の連絡調整を担う窓口の設置と、一括寄贈による送料負担・事務負担の軽減、またWEBシステム導入により寄贈を安全に行える「ミールズ・オン・ホイールズプロジェクト」を2020年2月

「ミールズ・オン・ホイールズ ロジシステム」(通称:MOWLS)

精選×ストック×シェア
MEALS
WHEELS
ミールズ・オン・ホイールズ ロジシステム

子ども～高齢者まで、全国のこども食堂等「居場所」に集うすべての人が食事を得られる環境づくり

寄贈食品を全国に届けるため、全国のネットワークへの食糧分配(シェア)、各地への配送(物流)、食糧保管倉庫(ストック)の整備を行う

特徴
全国のネットワーク / 安心・安全な仕組み
新たな市場＝情報の流れる仕組み / 無料

- ✓ まとめて納品・荷受けすることで寄贈時の配送費と調整負担を軽減
- ✓ 小さい団体も寄贈が受けられる環境整備

© 2023 mow

より稼働、企業からの食品寄贈を全国につなぐしくみづくりに着手した。

2-2 現場の変化

以前、子ども食堂の課題としては「必要な人にサービスが届いていない」という声が多かったが、コロナ禍により公民館など公共施設に集まる活動の継続が難しくなり、代わりにフードパントリーやお弁当形式で食支援を行う団体が全国的に急増。コミュニティと生活支援の様相を併せ持つ団体に加え、生活支援を前面に掲げた団体も全国的に急増した。

2-3 アウトリーチ(訪問支援)としての食

子ども食堂の多くは、コロナ禍の半年間に、フードパントリーやお弁当の配布をと考えていたが、現在に至るまで3年余り、たとえ会食を再開しても個別世帯への食支援機能を兼ね備え活動している団体が数多く見受けられる。本会では、活動団体が長引くコロナや物価高騰に因應するかたちで食を通じた個別相談支援や訪問支援に取り組み始めた現状把握に努め、これにより食が相談支援や訪問活動において重要な手段となっていることが明らかになった。行政機関や社会福祉協議会、そして福祉施設他機関は食支援団体との信頼関

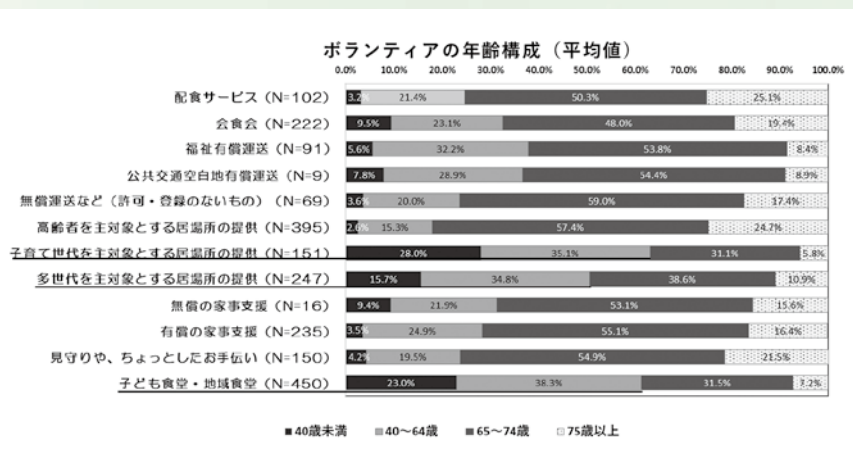
係を築くこと、そしてその先に見える個人の抱えている課題を発見し、適切に「つなぐ」ことが食支援の重要な機能だと考える。

3. これからの多様な食支援について

3-1 活動の広がりと担い手

本会が令和元年に行った全国調査から、①子ども食堂・地域食堂、②子育ての居場所、③多世代居場所、④会食会の順で、2016年以降に新たに取り組みが始まった活動数が多く、その中で「子ども食堂・地域食堂」「子育て居場所」「多世代居場所」の5〜6割が、2016年以降に設立された団体であり、地域を支える新しい担い手が生まれている。

次に、各活動別のボランティアの年齢層をみると、①子育て世代を主対象とする居場所の提供、②子ども食堂・地域食堂、③多世代を主対象とする居場所の提供の順で、65歳未満のボランティアの年齢構成が高く、比較的若い方が参加している状況が分かる。一方で、年代別食品摂取のデータから、1995年を100%とすると、2019年では1〜6歳の男女共に食品摂取量が9〜10%減少し、30代男性、



3-2 誰もが対象となりうる活動へ

に関わることの意義は大きい。

日本の総人口は約1億2千6百万人、令和77年は約半分の6千3百万人と推計されている。合わせて、令和2年の全国の1世帯当たりの平均人数は2・21名と縮小傾向であり、全世帯の構成は1人世帯で38%、次いで2人世帯が28%、3人世帯は17%と、3人未満の世帯の合計は世帯全体の83%になる。夫婦が共稼ぎをしていれば3人家族でも孤立となる。ふきのとう設立時には高齢者の孤立が目立ったが、現在は子どもから高齢者まで幅広い年代の方が各地で孤立しやすい構造となっている。孤独は防ぐのは難しいが、地域で食を通じたコミュニティが広がることで孤立は防げるのではないか。

1人または2人暮らしの合計が6割を超えるのならば、これからの食支援は福祉的な支援を必要とする層から、誰もが対象となりうる活動へと変容が求められる。こうした変化に合わせて多様な要素を包括するであろう、「食+多世代の居場所」が今後ますます広がることが期待される。

20〜30代の女性も同じく10%減少している一方、70代以上はプラスとなるなど、きちんと食べられていることが分かる。食のある居場所づくり活動は「きちんと、食べることに対して生活習慣がある方が、他世代に対して行うことが望ましく、地域での食習慣や生活が安定している70代が食支援活動



あなた やまがた たからびと

かみのやまこども食堂『かえる家』代表・副代表（上市市）

萩生田 充知子さん・祐司さん

県内で自ら学び続け、いきいきと活躍している方を「たからびと」として、インタビュー形式でご紹介します。今回は孤食をなくそう、孤立をなくそうを目的とし、住職を務める浄光寺での子ども食堂や、中心街でのフリースクール等を運営されている萩生田充知子さん、祐司さんご夫妻にお話を伺います。



『まなvivaかえる家』にて萩生田祐司さん（左）、ボランティアの長岡早苗さん（中央）、萩生田充知子さん（右）。浄光寺の別名「がま寺」そして第二の家に帰っておいでという気持ちを込めて「かみのやまこども食堂『かえる家』と名付けたとか。「おかわり!」と来てくれる時が嬉しい!（祐司さん）子ども達と話しているのが一番楽しい!（充知子さん）

—活動のきっかけ

東日本大震災後、長期休みの時に家に子どもを一人にしたくないという保護者の声に励み、お寺で子ども達を預かり、一緒に勉強して昼ご飯を食べる活動を始めました。ある時、長男が「学校で先生が一生懸命お昼ご飯を食べさせている子がいるんだ。休日もお昼ご飯を食べないみたいで、連れて来てもらいたい」と言ったので「連れておいで」と。そいつの子がもつたのであるかもしれないと活動を続けました。最初は元気な子ども達が集まり、楽しくて安心できる場所だとわかったら、困っているお友達を誘って来てくれるようになりました。子ども達のそんな力を大切にしたいと、子ども食堂は子どもだけが対象です。ただ、子ども達が元気に過ごすために、お母さんの支援も必要。お母さんが不安だと、その不安が子ども達に移ってしまいます。お母さんが元氣だと子ども達も笑顔になるだろうと、市内商業施設など

—地域で子どもを育てる

『まなvivaかえる家』は、いろいろな理由で学校に通えない子の居場所、学校の長期休みを除き、平日9時〜15時に開けており、週2回、夜に無料塾も開いています。お金は取りません。最初は保護者と子どもと面談して、学校側にも意見を聞きながら、子どもが自分の意志で来て、充電して、学んで、学校に行けるようになればベストだよねという感じで運営しています。市教育委員会の協力、ここでの学習が学校の出席日数になる仕組みや、東北芸術工科大学の学生さんの協力、インターネット上で子どもの学習の記録を学校と共有できる仕組みもできました。ご飯を一緒に作って食べたり、散歩して地域の方と話したり、お使いをしたりと、ちよとした成功体験も増やしていこうと思っています。

—これからの目標は?

将来、子ども達が大きくなったら帰ってきやすい、子育てをしたいと思ってもらえる町にしたい。そのためには、子どもの生きる力を育まなければいけない。いつかどこかで止まった時に乗り越える力を持たなきゃいけない。そして仕事ができなければ貧困や負のスパイラルは止められない。選択肢を広げて頑張れる仕事を見つげるためにも、小・中学校からの学力の底上げが必要です。学力と生きる力をつける、それができる受け皿を作ってあげなきゃと思いつながら、自分達も子ども達から毎日学び、楽しみながら活動しています。自分達が楽しくないと続きませんし、この活動を通して、人って怖くないよ世の中って楽しいんだよということが、子ども達に伝わると嬉しいですね。

個人の活動で、お寺も忙しいですが、檀家の女性部さんが「子ども達を助けられるのは今しかないから、お寺は私達に任せて行ってきなさい」と留守番をしてくれたり、活動を新聞で知った方や賛同してくれた方がボランティアに来てくれることで、活動ができています。

大盛り、特盛り、
まんこ盛り、
どれがいい!?



かみのやまこども食堂
『かえる家』HP
<https://kodomosyokudou.wixsite.com/kaeruya>

令和5年度

山形県生涯学習センター事業紹介

今年はここに注目!

あなたやまがた たらびと
~1人ひとりの県民がいそいそと活躍する
「生涯学習社会やまがた」を目指して~

学習情報・機会の提供



山形県生涯学習情報提供システム「やまがたマナビィnet」

●学習情報収集・提供事業

「やまがたマナビィnet」



●長寿社会づくり推進事業

●「ふるさと塾」推進事業

●広報紙発行事業

広報紙『生涯学習やまがた』発刊

「やまがたマナビィnet」では県内の講座・イベント、講師・指導者、団体・グループ、施設等の情報提供を行っています。地域・学校・家庭いずれの場でもご利用いただける情報が満載です!



昨年度の「山形学」講座現地学習の様子。

●「山形学」推進事業

山形学フォーラム



山形学講座

『遊学館ブックス』の発刊

平成2年の生涯学習センター開設時より中核事業として継続している「山形学」。毎年、多様な切り口から山形を学びます。今年度は、「山形の歴史的成り立ち」をテーマに講座を開催。中世・近世を中心に、歴史や民俗の観点から山形の成り立ちを考えていきます。



県民の皆さんや高校生の地域づくり活動を支援しています!

●生涯学習活動支援事業

やまがた地域創生事業



青少年地域学習活動支援事業

特色ある生涯学習活動支援事業 ほか

今年度より新たに「やまがた地域創生事業」が始まりました! 県民の皆さんが広く学習する機会を提供する事業や、山形の課題解決につながる取り組みを支援します!

学習活動支援者の育成



昨年度の「地域づくり人材育成セミナー 防災・減災編」の様子。避難所運営ゲーム(HUG)を使用してワークショップをしました。

●生涯学習関係職員研修事業

パワーアップセミナー



地域づくり人材育成セミナー

●高齢者生きがいがづくり・生活支援活動人材育成等事業

入門講座(フォーラム)

実践講座(担い手養成講座)

分野別研修(有償ボランティアの仕組みづくり・移動支援)

専門職派遣

●シニア地域実践活動支援事業

行政職員向けの研修のほか、地域づくりに興味関心のある県民も対象にした研修を開催。今年度は「防災」、「地域住民にしっかり伝わるやさしい日本語」をテーマに、事業企画と運営のスキルアップや業務に役立つ研修を開催します!

Check! P.8

学習成果の活用



昨年度の山形県地域づくり実践交流集会の様子

●「山形学」推進事業【再掲】

山形県地域づくり実践交流集会



●高齢者生きがいがづくり・生活支援活動

人材育成等事業【再掲】

マッチング研修会

フォローアップ研修会

県内外で地域づくりや地域学を実践している民間団体、教育機関、行政関係者などが集い、地域づくりや地域学の振興を図るとともに、より一層充実した活動を展開するために学び合います。

Check! P.8

このまちに注目!



地域の取り組みを
紹介します

舟形町

舟形町教育委員会
高校生ボランティアサークル ふなっ子

おもいやり
Compassion ～繋がる人と人の輪～

■ 活動内容 ■



折り紙アート

昨年度は冬期間に町を彩るイルミネーションのデザインを考えたり、手形アートなどの制作物を作り福祉施設に寄贈するという

制作メインの活動を行いました。イルミネーションのデザイン案を自分達で考える活動は、町民だけでなく、町外の方からも「良かったよ」「綺麗だね」「すごいね」など嬉しい声をいただきました。

今年度はコロナの制限も徐々に緩和され、様々な活動が行えるようになります。昨年度まで実施することが出来なかった保育所訪問や研修会、ゴミ拾い等の様々な年代の方と関わる活動を再開していきたいと考えています。

■ ここが大変 ■

コロナが落ち着いてきてはいますが、いまだ様々な制限があると感じます。そのため、自分達が行いたい活動が出来ないことが苦勞している点です。また、全員3年生でこれから受験を控えているため、活動できる期間が短いことが寂しいです。

■ ここがうまくいった ■

工夫している点は、子どもからお年寄りまで幅広い年代の方々と関わるボランティアを通して、皆さんを笑顔にすることです。また、町のPR活動を行うことも大切にしています。昨年度はイルミネーションを通して、舟形町をPRしました。

参加者Voice

ボランティアってゴミ拾いだけ?と思っていたイメージを変え、誰かの支えになればといった感情になれたことがこの活動を始めて良かったと思えることです。(高校3年生 女子)

高島町

二井宿わくわくプロジェクト
健康福祉部 おらだの茶の間

わくわくしさ、ござっとごえ

■ 活動内容 ■



恵方巻作り

「自らが楽しく!」2014年、少子高齢化が進む地域をどうにかしたいと語り合いを重ね、「二井宿わくわくプロジェクト」の活動を始めました。

健康福祉部では、空き家を利用した交流館を会場に、毎週木曜10時～13時に誰でも「ござっとごえ」と、居場所を開いています。参加は主に高齢者ですが、春・夏休みには子ども達も! 小さな集落で参加者も固定化しやすいため、毎回、季節の団子飾りや恵方巻作りなどの内容をみんなで考えています。今年度はお花見でスタートしました。

■ ここが大変 ■

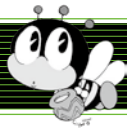
いまだ模索中の点は、男性の参加です。そして今後の課題は、スタッフの次世代への引継です。

■ ここがうまくいった ■

毎回の内容を考える時に、スタッフも参加者も一緒に考えるようにしたこと。昼食のメニュー作りも、なるべく希望を取り入れています。

参加者Voice

- ▶ すごくいい! 自由にしゃべられるし、いろんなことができる(70代女性)
- ▶ 楽しんでます! 常には一人なので、しゃべったり笑ったり、ためになる話が聞けたりするので参加しています(80代女性)
- ▶ こま来っと、いろんなうまいもの食べられるから、楽しみだあ(80代女性)



山形県生涯学習センター 高校生向け 助成制度【二次募集】のご案内

青少年地域学習活動支援事業の二次募集を行います。詳しくは7月中旬にHPでお知らせいたします。

青少年地域学習活動支援事業

山形県の高校生の皆さんの活動を応援します！県内各地の地域貢献に関する活動に必要な経費の一部の助成を受けてみませんか？

- ・生徒による自主的かつ先進的な地域学習や地域づくり活動
- ・生徒が地域と協働で行う地域学習や地域づくり活動



助成事業HP

一般向け 関係者向け

高齢者生きがいづくり・生活支援活動人材育成等事業

人生100年時代どんな地域でどんなふうに住らしたいですか？住み慣れた地域で安心して暮らしていくために、高齢者の生きがいづくりや地域の支え合い活動について学んでみませんか？詳細はチラシやHPにてご確認ください！

■生活支援活動ステップアップ講座：各定員30名
活動で生じたニーズ等（有償ボランティアの仕組みづくりや移動支援等）に対応できるよう知識や技術を学ぶための研修。

〈移動支援〉11月中旬（会場未定）

〈有償ボランティアの仕組みづくり〉11月中旬（会場未定）

受講料 無料

問合せ 山形県生涯学習センター（下記）へ

洗心庵からのお知らせ 一般及び18歳以下 第10回洗心庵写真コンテスト

第10回洗心庵写真コンテストは、3年ぶりに一般の部が復活し、U-18の部との2部構成で開催します。四季折々の洗心庵の情景を写真に写してみませんか。スマートフォンで撮影した写真でも応募可能です。お気軽にご応募ください（入園・入館無料）。詳しくはQRコードよりご確認ください。



洗心庵HP

応募期間 11月1日(水)～令和6年1月31日(水)〈当日必着〉
テーマ 春夏秋冬の洗心庵（洗心庵の庭園・建物内で撮影した作品）

応募規定 A4サイズ又は四ツ切のみ（組み写真は不可）、応募点数一人1作品

表彰式 令和6年3月中旬ごろ。洗心庵多目的ホールにて
問合せ 洗心庵（下記）へ

一般向け 関係者向け

地域づくり人材育成セミナー

公民館やコミセンなど、地域で実践できる課題解決のための講座等の事業企画と運営のスキルアップを目指します。

【地域の防災力を高める講座】

9月1日(金) 東根市さくらんぼタントクルセンター（東根市）

9月8日(金) 余目第四まちづくりセンター（庄内町）

【地域住民にしっかり伝わるやさしい日本語講座】

9月19日(火) わくわく新庄（新庄市）

9月20日(水) シェルターなんよう（南陽市）

問合せ 山形県生涯学習センター（下記）へ

山形県地域づくり実践交流会 一般向け 関係者向け

県内の地域づくりや地域学の実践団体、地域づくりに関心のある方が集い、より一層充実した活動を展開するために交流し学び合います。詳細は後日、チラシやHPにてご確認ください。

日時 11月4日(土) 13:30～16:30

会場 遊学館（山形市）

講師 廣瀬隆人氏（(一社)とちぎ市民協働研究会代表理事）

編集 近年、Well-being ウェルビーイング が注目されています。これは「良い状態」や「持続する幸せ」など心身・社会的に満ち足りている状態を表す言葉だと言われています。人が幸せに生きていくためには自己実現や個人の幸せに焦点が当たりがちですが、多様な人々や地域と関わることで、地域全体の幸せや豊かさに繋がっていくのでしょうか。今年度は、このような多様な関わりの中で育まれる Well-being について考えていきます。(R)

「生涯学習やまがた」バックナンバーはこちらから！



編集発行 (公財)山形県生涯学習文化財団 令和5年7月発行

山形県生涯学習センター 〒990-0041 山形市緑町 1-2-36〔遊学館〕
TEL 023-625-6411 (貸館専用TEL 023-676-7182) FAX 023-625-6415
E-mail yama@gakushubunka.jp

URL <https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/>

開館時間 9:00～21:00〔夜間利用が無い場合は20:00まで〕

休館日 第1・3・5月曜日、第3日曜日、年末年始

洗心庵〔山形県生涯学習センター分館〕 〒990-0041 山形市緑町 1-4-28
TEL 023-664-2800 FAX 023-664-2816

開館時間 9:00～21:00〔夜間利用が無い場合は19:00まで〕

〔12月1日～3月31日までは夜間利用が無い場合は17:00まで〕

休館日 毎週月曜日、毎月第3日曜日、年末年始

読者プレゼント

「生涯学習やまがた」をご覧いただいている皆さまに、感謝の気持ちを込めて、抽選で3名様へ遊学館ボックス最新刊『山形にも迫る環境異変～先人の知恵に学ぶ～』（2月15日発売1,100円）をプレゼント！左記の山形県生涯学習センター広報紙担当あてに【①お名前・②住所③興味を持たれた記事④内容についてのご感想・ご意見・ご要望】を添えて、はがき・メール・FAXでご応募ください！締め切りは8月末です。